

「男、突っ走る！」

第71回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

橋田本山国	木内
崎所村中枝	雅也
俊晴敦佐代子	(22)
悟子臣夫	(47)
(61)	(53)
(57)	(42)
市民映画プロデューサー	『オフィスツリーイン』代表
劇団主宰者	
音楽プロデューサー	
市民映画プロデューサー	
WEB会社社長	

1 居酒屋（夜）

N 「国枝さんによる市民ミュージカルのプロジェクトは、あつという間に進み始め、この日は主要スタッフに顔合わせを兼ねた決起集会が開催されました。国枝さんが総合プロデューサー、国枝さんと共に市民映画のプロデューサーを務めた田所さんが会計担当、『ふれいす』でWEB担当をしている橋崎さんがここでもWEB及びSNS担当、僕が議事録作成及び制作業務全般担当となり、これ以外に今回の市民ミュージカルの脚本と演出を担当する劇団主宰者の山中敦夫さんと、劇中の音楽を手掛けることになった音楽プロデューサーの本村晴臣さんが加わり、運営スタッフはこの六人の顔ぶれとなった」

雅也、佐代子、橋崎、田所、演出家・

山中敦夫（42）、音楽プロデューサ

ー・本村晴臣（53）が食事をしてい
る。

雅也「そうですか。山中さんは、東京ですつと劇団をされてたんですか」

山中「そうなんです。母が高齢になって、いつまでも一人にはできないと思って、嫁と相談して去年こっちに帰ってきたんです。

まあ、Uターンはしてきましたけど、演劇が忘れられなくて、名古屋で立ち上げました」

雅也「ずっと演劇をされてるんですか？」

山中「十八で大学進学のために東京に行って、そこからずっと演劇をやってますから、もう二十四年ほどになりますか」

橋崎「あれ、二十四年だと木内君が生まれた時じゃない」

山中「ちょうど、阪神淡路やサリン事件があった年に東京行ったので、平成七年ですね」
雅也「じゃあ、ちょうど僕が生まれた年になります」

山中「若いですねえ」

雅也「いえいえ、そんなことは」

橋崎「(山中に) 東京では、ずっと演劇だけで？」

山中「(苦笑して) まさか。映像制作会社に入って、WEBの担当をしたり、ドラマの助監督をしていた時期もありました」

雅也「随分と経験豊富なんですね」

山中「自他共に認める演劇バカですよ」

佐代子「山中さんは、私がプロデューサーをした市民映画で監督してくださいました方からご紹介いただいたの。(と本村を見て) ハルさんは、その映画で作中の音楽全般を作ってくださいった方なの」

雅也「(名刺入れから名刺を見ると) えっと、本村さんは音楽プロデューサーなんですか」
本村「(佐代子と田所を見ながら) さよちゃんとしちゃんが中心でやってる音楽グループがあるんですけど、僕は専属で楽曲を提供させてもらってます」

佐代子「交流センターのモニターで、たまに映像流れてるの、知ってる？」

雅也「ああ、映ってますよね、国枝さんたち」

佐代子「あれでバックに流れる曲を作ったのが、ハルさんなの」

雅也「そうでしたか」

田所「今回の市民ミュージカルは、本当に国枝さんの繋がりで何とか運営スタッフがまとまったって感じね」

雅也「やっぱり、市民映画のプロデューサーをしてるだけあって、業界というか専門的な方との繋がりがあるんですね。普段、

『ぷれいす』ではお互いスタッフとして一緒にしてますけど、よくよく考えたら、国枝さんの本来の姿っていうのを見たことがなかったですもんね」

佐代子「まあ、市民映画のプロデューサーっていうのが本来の姿ではないんだけどね」

橋崎「でも、こういうプロジェクトに参加できるのはなかなかないから、僕としてはすごく楽しみにしてるんですよ」

佐代子「ありがとうございます」

雅也「僕もです。普段、原稿書いたり、脚本しか知らなかった人間ですからね。舞台公演は数え切れるぐらいしか見たことがないので、僕もこの場でいろいろ勉強させていただけたらと思ってるんです。山中さんという、現場経験豊富の方も一緒ですし」

山中「木内君は、脚本を書いているんですか？」

雅也「まあ、それほど大きなものじゃないんですけどね」

佐代子「何言ってるのよ。YouTubeドラマを何本も書いて、確か去年の夏は映画の脚本も担当したんでしょ。それで、撮影で千葉まで行ったって教えてくれたじゃない」

雅也「そうですけど、実績としてはまだまだこれからですよ」

山中「良いな。こんな若くて、しかも同じこのエリアで脚本をしている子がいるなんて、何だか俺としてはすごく嬉しいですよ」

雅也「本当ですか？」

山中「いろいろ話も合いそうですし」

佐代子「この運営の顔ぶれにして良かったの
かもしれないわ」

田所「そりゃ、国枝さん繋がりで招集された
メンバーですもん。私だって、会計担当し
て頑張るけど、衣装だって依頼があれば作
りますよ」

佐代子「ありがとうございます。作品のこと
は山中さんに、音楽のことはハルさんに全
てお願いします。私は総合プロデューサー
として全体進行や会場との打ち合わせなど
の渉外担当として、橋崎さんにはSNSや
WEBを担当していただいて、木内君には
制作業務全般と、『ぷれいす』同様に議事
録作成をお願いしようと思います」

橋崎「はい」

雅也「分かりました」

山中「補助金の採択が下りてプロジェクトが
始動したので、早速本番に向けてのスケジ
ュールを確認したいんですけど、八月の五
日の日曜日が本番なんですよね」

佐代子「はい。会場は交流センターのホールです」

雅也、鞆から手帳を取り出すとメモを始める。

山中「あそこかあ」

雅也「何かあるんですか？」

山中「あそこのホール、下手がないんだよな」

雅也、『しもて』とメモする。

佐代子「そうなんですよ。だから、それをどう解決しようかなと思って。（と書類を配って）これが、現状の中で組んでみたスケジュールです」

田所「稽古がゴールデンウィーク明けから、毎週日曜日の十三時から九時。稽古回数十回もないわね」

佐代子「現状としてはね。後、これにリハースルの予定だったり、もし追加稽古が必要だったら、別途予定は組もうと思ってます」

橋崎「稽古は、どこで練習するんですか？」

佐代子「市内の公民館の会議室を借りること

になると思います。ただ、場所によっては大きな声や音を出せないところがあるので、そこは注意しないといけません」

雅也「確かにミュージカルとなると、歌も音楽も声もそれなり出さなきゃいけないですもんね」

山中「正直、この回数だとまず稽古日数は足りないと思います。最初の二回は、キャスト同士の親睦を深めるためのワークショップを予定していました。あめんぼとか外郎売とか腹式とか」

雅也、『あめんぼ』『ういろうり』
『ふくしき』とメモをする。

佐代子「じゃあ、キャスティングは最初の段階では決めないということですか？」

山中「今書いてる脚本は、登場人物を六人に絞っています。その六人のキャスティングも、実際にキャスト同士で読み合わせをしたうえで、考えていきたいと思っています」

佐代子「キャスティングは、本人の演技力な

どをみて山中さんが判断したうえで、私に
後で報告してください」

山中「分かりました」

本村「音楽の観点から、僕もちよつと良いか
な」

佐代子「はい」

本村「今、山中君が六人って言ってたけど、
この六人の歌唱力を心配してるんだ。（と

山中に）本番って、マイク使う？」

山中「現状では、本編中は全部マイクは使わ
ない予定です」

本村「あのホールで、マイクを使わないって
ことになるよ、発声にも影響してくるでし
よ。腹式の発声は、稽古の時も本番前も各
自でそれなりにするから良いとして、音感
の心配があるんだよ。いくら届くような声
を出しても、音痴だったらどうしようもな
いでしょ」

田所「ああ、その心配はあるかもね」

本村「稽古中、どこかで歌唱稽古をする時間

も取ってほしいかな。もし仮に歌が上手い子が来たとしても、やっぱり基礎的なものからやって、それなりの歌唱力までは伸ばしてあげたいんだよね」

山中「場面ごとの稽古のとき、もしかしたらその間時間が空いちやう可能性もありますから、そこは分担してやりますか」

田所「となると、稽古で使う部屋とは別の部屋を確保しないといけないわね。公民館の予約、私がやろうか」

雅也「でも、制作業務全般は僕が……」

田所「（微笑んで）市内の公民館のことは、私知り尽くしてるから任せといて」

雅也「じゃあ、お願いします」

佐代子「そうね。それに、木内君は隣町から来ることになるんだもん、あまり負担がなないようにしないと」

雅也「良いんですよ、僕は。打ち合わせとかだったら、いくらでもこっち来ますから。お気になさらず」

山中「行動力あるんですね、木内君は」

佐代子「そうじゃなかったら、専門学校の頃からフリーペーパーのライターやったり、自主映画のスタッフなんてやらないか」

雅也「（苦笑して）まあ、そうですね」

橋崎「オーディションは、四月の中旬ですね。そうなると、そろそろ告知の準備をしたほうが良いかもしれないですね」

佐代子「ええ。地元新聞の記者の方には、それとなく話はしてあるので、告知のタイミングで記事掲載のための取材をしていただくくように、またお願いはする予定です」

雅也「来てくれると良いですね」

佐代子「そりゃもちろん」

山中「国枝さんの中で、この市民ミュージカルは一回で終わる予定ですか？」

佐代子「それについては、私も今考えてるところなんです。地元のパフォーマンスグループと言う形で、これから二期生や三期生のような形でメンバーを増やして、いろん

なイベントや舞台公演に出演するというのもありかなって」

山中「プロを目指すためのパフォーマンスグループという位置づけですかね。それによつては、作品のクオリティにも影響すると思います。プロを目指すことを謳うんだつたら、僕もそれなりの稽古内容にします。でも、未経験の人が趣味のような感覚で参加すると、当然プロを目指そうと思つてる人との温度差が生じます。なので、どういう位置づけにするかは大事だと思います」

佐代子「私の中では、市民ミュージカルとは形式上謳っていますが、プロを目指すというのを根底にして良いと思つています。どこかへ巣立っていくための通過点だと思つてもらえれば」

山中「なるほど。それなら問題ないと思ひます。部活からプロになる人もいますから、それと同じようなイメージをしておきます」

田所「グループの方針はそれで問題ないと思

うけど、夏祭りの中でやる以上は地元感や市民性を打ち出したほうが良いんじゃないかしら。あまりプロを強く押し出すと、ハードルが高くなるような気がする。それに、これって元は国枝さんたちがやってるフリーペーパー『ぷれいす』の派生企画のような感じでやるわけでしょ。だから実行委員長にも國村さんの名前があるわけだし、『スリジェネ』っていう、このプロジェクトというかチーム名だって、『スリージェネレーション』っていう『三世代』の英語を省略した造語なわけだから、シニアの人にも身近に考えてもらうようなことをしたほうが私は良いと思う」

佐代子「市民性を強くするっていう面では、私もどうしようかって考えてるところなの。ただ、まだプロジェクトが始動してすぐだから、これといったアイデアが浮かんでないんだけどね」

本村「例えば、カーテンコールの時に一緒に

歌を歌ってもらうのはどうかな？ 童謡とかパブリックドメインになってる曲とか、どの世代も一度は聞いたことある歌を使うんだよ。そうすれば、懐かしいなと思ってくれる人が観客の中にいるかもしれない」

山中「シニア世代となると、俺の親世代だからおおよそ七十代から八十代か」

雅也「ミュージカルの中で、変に演歌入れるのは変ですもんね。雰囲気崩れちゃいますし。うちのおじいちゃんはおばあちゃんでも口ずさめるような曲、何かあったかな……」

橋崎「作品の雰囲気に合わせて音楽作るのも大変ですね」

本村「まあ、それが仕事ですけどね」

山中「演目は、ファンタジー要素を取り入れています。極力どの世代も分かるように、複雑な設定はしていません。それはおいおい修正します」

田所「現状の登場人物は、どんな感じなんで

すか？」

山中「地元に住む男子高校生と女子校生、それからその友人。それで、夏という要素を取り入れようと思って、彦星と織姫、それからストーリーテラーポジションとしてカササギという鳥を登場させます」

雅也「現代の高校生たちに、織姫と彦星が出てくるなんて、随分壮大な物語になりそうですね」

山中「壮大なものになるように頑張りますよ。せつかくなら、木内君も出たら良いのに。今回の募集するメンバーの年齢は高校一年生から三十歳でしょ、ちょうど入ってるじゃん」

佐代子「そうよね」

雅也「（慌てて）いやいや、勘弁してください。脚本は書いてますけど、とても表に出て演技するなんて無理ですよ。歌も音痴ですし、声も小さいですし、ダンスなんてものほかですよ。僕なんか、自慢じゃな

いですけど、高校の時体力テストの結果は学年最下位で、体育の成績は大体二か三、マラソン大会は大体ビリから数えたほうが早かったですし、小学校の運動会なんて六年間かけっこで全部ドベだったんですから」

橋崎「木内君って、そんなに運動神経悪かったんだ」

雅也「同級生の中で、僕の運動神経の酷さ是有名ですからね。スポーツ大会なんて、僕が同じチームになったらまず優勝はあり得ないっていう雰囲気だったんですよ」

橋崎「それはそれで可哀想だね」

雅也「なので、僕は遠慮させていただきます。僕は裏方で誰かのフォローをしてるほうが性に合ってるんです。それは、自分が一番よく分かっています」

佐代子「何だ残念だな。木内君のような未経験者の人でも参加できるように、なるべくハードルは低くしたかったんだけど」

雅也「そのお気持ちだけで十分です」

佐代子「はいはい」

本村「あ……。 (と何かを閃いて) 楽曲だったら、懐メロをオマージュしたような感じにしても良いかもな。『あ、この曲あれに似てる』みたいなの。パクってるわけじゃないから、あくまでオマージュだから」

田所「そこはぜひ、ハルさんの発想力で」

本村「頑張るわ」

田所「楽しみです」

本村「あの曲ならどうかな。『見上げてごらん夜の星を』」

田所「確かに、あの歌なら三世代とも歌えると思う。音楽の教科書にも載ってたはず」

本村「あの歌は、オーディションでも音域とかなを確認するのにも適してる歌なんだよ。」

そうだ、オーディションの歌唱審査、この歌使おう」

佐代子「木内君は、この歌知ってる？」

雅也「もちろんです。それこそ、高校の音楽の授業で歌った記憶あります」

本村「じゃあ、決まりだな」

佐代子「オーディションは、歌唱審査と演技審査ですかね？」

山中「あと、自己PRタイムを一分。どういう子が来たのかを知りたいのと、普段の声のボリュームを知りたいので」

本村「ああ、それはあるかもね」

佐代子「演技審査は、どんな風にしますか？」

山中「今書いてる台本の一部を抜粋して、一対一のペアの芝居を見ようかと思えます。組み合わせを変えた状態での芝居も見てみたいので、最低でも一人二回ほど同じ芝居をしてもらおうかと」

雅也「ペアが違うと、芝居も変わるもんですか？」

山中「もちろん。例えば片方が物凄く演技力が上手いと、それほどの演技力でもない相手側が良い意味で引っ張られて、芝居が良くなることもあるんです。その場の空気や間の取り方も、人によって違ったり、いく

つも演技プランを持つてる子だと相手によ
ってあえて芝居を変えてくるパターンもあ
ります。そういう、参加者一人ひとりが持
ってる演技力を見てみたいんです。それで、
配役も決められるかもしれませんし」

雅也「（感心するように）そういうものなん
ですね」

山中「失礼。つい演技の話になると、力が入
ってしまいました」

雅也「いえいえ。ぜひ演技論、また聞かせて
ください。脚本の参考になるかもしれませ
んから」

山中「ぜひ、いつでも」

佐代子「いろいろ決まりそうで、安心しまし
た」

雅也、ひたすらメモ書きを整理してい
る。

N「僕は議事録作成の中で、使った言葉をそ
のまま入れていましたが、自分には用語の
意味が分からず、後からこっそり調べると

いう状態が何度も続いていました。この顔合わせの時にも『あめんぼ』や『外郎売』がどういったものなのか全く知らず、『腹式』つまり『腹式呼吸』のことであることは後になって気が付いたほどです。他にも舞台の『上手』と『下手』が、客席から見ると左が『下手』、右が『上手』であることも後から調べて知ったことでした。市民ミュージカルの運営会議に参加するために、僕は隣町に行き来する機会が増え始めました。フリーペーパーの会議は週一でも、市民ミュージカルの会議は多いときで週三のときもありました。その都度、会議の中で、特に山中さんは業界用語や専門用語を頻繁に使っており、僕はこっそりスマホで単語を調べるということが恒例になっていました。それから数日後、地元新聞にオーディションの告知記事が掲載されました」

つづく